

私の物語は、友人だった 2 人の父親についての話だ。彼らのそれぞれが結婚するために出立した。彼らは子供を儲けたが、ひとり、娘と息子、もうひとり、息子だけだった。2 人の子供がいる父親は、彼の子供たちを教育することが出来、男の子は学業を修めるまでになり、父親は彼をヨーロッパに行かせて学業を続けさせた。この息子はそこに身を落ち着けた。一方、娘の方は成長して、家の「女王」になった。すべてを仕切るのは彼女で、父であろうと叔父であろうと何も口出し出来なかった。

娘はこのような具合で家に留まっていた。弟が、身を固めたいという内容の報せを寄越した。姉の娘は、自分が弟のために妻を選ぶことを決めた。この娘が厄介なので、この願いを聞いてやろうとする者はなく、誰もが父か叔父が結婚の願いを出すことを期待していた。娘はあちらこちら探したが、結婚させるような女性は見つからなかった。

弟は、自分で結婚するための女性を探すためにやって来て、姉と一緒に出立したが、姉は彼を落胆させるだけだった。彼らは長い間待ち、弟は結構な歳になってしまった。家族は、息子が女性を見つける手段を探したが、結局は姉に打ち勝つことが出来た。

息子は結婚するために戻ってきた。彼は結婚に必要なすべてのものを送っていたが、彼の姉がそれを人々に与えたり、売ったりした。それは、彼女が家の王女であるから、望んだことだった。息子は自分の結婚式を祝うために戻って来たが、彼女の方は、起こったことを認めた。家の中には何もなかった。彼らは、結婚式を行うのに必要なものを揃えることにした。しかし、姉の方は、結婚を台無しにする魔術に取り掛かった。ところがその魔術は彼女本人に返ってきてしまい、彼女を苦しめた。弟の方は結婚して、ヨーロッパに戻ったというのに。

彼女は長い間苦しみ続け、結婚しているはずの時期まで続いた。どんな男も彼女に結婚を申し込もうとはせず、彼女は歳をとってしまった。彼女の父親は、友人に会いに出かけ、娘のための助言を求めた。父親と友人は村に行き、娘のための男を捜したが、誰も見つけられなかった。娘の父親は友人に言った。

「こうなったら、君の息子に来てもらって私の娘と結婚した方がいい」。

長い話し合いの結果、彼らは互いに了解した。そこで、[友人の]息子が彼女と結婚することになった。しかし、彼女は相当の歳に達しており、子供を持つのが難しいことがわかった。彼らは子供が欲しかったので、それは大問題だった。彼らはそこでまた魔術に戻った。

彼らはあちこちに行き、その度に、彼女を治すことが出来る魔術師がどこにいるかを人々に尋ねた。しかし、そのような場所も人物も知ることは出来なかった。彼らは以前の魔術師のところに行き、尋ねると、彼女は考えてから言った。

「私は既に魔術を行ったことがあるが、そのために非常に苦しむことになった」。

彼らはこの魔術師に会うことにして、魔術師は彼女を治しにやって来た。しかし、彼女が歳を取っていたので、子供を作ることは出来なかった。

しかし、彼らは彼女が子供を作れるための方法を探した。夫婦は揃って、治療をするために長い旅に出た。しかしうまくいかなかった。そこで夫が妻に提案した。

「子供を持つために、私がここで他の女性と結婚するとしたら、どうだろう」。

妻は賛成したが、結婚はしない、という条件でだった。つまり、彼は女性といるだけで、子供が出来たら、その子と一緒に帰るというものだった。夫はこの提案に驚いた。彼は妻と長い間話し合ったが、妻は言った。

「同じ家にいても、わからないようにお願いします」。

夫はひとりの女性を見つけた。彼は、妻と同じ家に彼女といたが、夫は妻が隣の部屋にいるのに、他の女性と寝ることに耐えられなかった。彼は[愛人の]家に行ったが、夜になると苦しみながら、広間のソファまで寝に行った。朝、愛人がどうしたのかと尋ねると、彼は「悩みがあるし、眠れない。というのも、悪夢を見てしまい、そこでは人々が私にひどいことをしにやってくるのだ」と答えた。こうして、彼らは、愛人が妊娠するまで過ごした。

愛人のお腹が大きくなって来ると、妻は自分が妊娠したことを家族に伝えるために呼び寄せた。そして、彼女が《アンダ》の娘[大結婚式をしなくてはならない長女]であったため、たくさんのものを必要とした。それに、大結婚式を行う必要があった。彼女の家族は大結婚式を行うことを望んだが、夫は拒絶した。多くの裏取引を経て、夫は最後には受け入れた。しかし、彼は妻に、実際に妊娠した女性を連れてくる必要があると言った。そこで妻は枕を取り、それをお腹の下に入れてふくらませた。そして二人は一緒に、大結婚式を行うことにした。妻は自分の家族に、同じく妊娠した友人と一緒に来ると言った。[一連の]式が行われ、妊娠している女性は、出産の時になって、新婦が、彼女の愛人の妻であることがわかった。また、彼女が、ただ子供を産むためだけにここに連れられて来たこと、そしてその後は、赤子なしに自分の家に戻されるということがわかった。このことが彼女を苦しませ、彼女は去ることを望み、妻と喧嘩を始めた。喧嘩は、妻が女性を叩くまでだったが、夫がやってきて引き止めた。彼は、彼女たちを落ち着かせ、その場をまとめることが出来た。

妊娠した女性は出産のために病院に連れて行かれ、夫はどこかと尋ねられた。夫は病院に行くと、彼女が出産するまで彼女と共にいた。妻の方はどうしてよいかわからなかった。もし彼女が男の子を生んだら、とか、もし彼女が子供を手放さないで自分の家に連れて行ったら、などと思い悩んだ。というのも、病院に行く前に、夫婦が子供を持つための色々な難事について聞かされていたからだった。

身重の女性が出産し、休んでいる時に、彼女は妻を呼んで言った。

「子供を差し上げます。あなたが望んでいたことですから。私は、ここを去ります」。

妻はためらい始めた。そこで、母になった女性は子供をもらってくれるよう懇願し、妻も最後には子供をもらうことを受け入れた。子供を産み落とした女性が、子供を救うために、その子を与えることに同意したからである。

夫は子供の母親が行ってしまう前に与えられるように、多くの金銀を集めた。彼の妻は、母親が出発するのを見送ったが、彼女の夫は耐えられなかった。結婚しなかった女性の方を愛していたからであり、彼女は多産で他の子供も産んでくれるからだった。しかし、妻はこれを受け入れず、彼女に言った。

「もし、承諾するならこの金銀をすべてもらって、他の人と結婚して、私に子供を与えることがないようにして下さい。私は以前と同じように生きていきます」。

[子供の母親は夫に言った]「本当に私を愛しているなら、この子を育てて下さい。この子を産んだのは私ですがあなたが父親なのですし、彼女は母親になれるでしょう、ただあなた方が子供を育

てるやり方次第ですが。もしこの子を立派に育てられれば、私は嬉しいし、あなたの愛を本当に信じられるでしょう」。

彼女は出発し、父親の方は、子供を育てるために妻の方に戻った。